

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

音の迷信(3)

●持続音と減衰音

視覚的な楽器の大きさと音の大きさは基本的にはあまり関係がないことは冷静に考えればご理解いただけたものと思いますが、子どもたちにはなかなか理解できない事でしょう。それでもこのことはS即ち音知覚の教育ではとても大切なことなのです。音に限らず外見だけではわからないものがこの世の中にはたくさんあることを学習すべき場面の一つだと思うのです。それでなくても多数決が支配する今の世の中で少数派の中にも優れたものがあることを知るような経験は大切です。例えばあのオーケストラといえどもピッコロは1~2本しか使われていないことなどからもそれは学習されると思うのです。音量もさることながら、どんな場面でどんな風に演奏されるからピッコロの見かけ上の大きさと関係がない聞こえ方があることを知るような学習の素地が大切なのです。

もう一つ子どもたちには訳の分からない音楽教師の日常語があります。それは「好きな音を選んで～」に始まる指示語です。「好きな音」とは一体どんな音の事なのでしょう。「嫌いでない音」と言う場合もあるでしょうが、「気に入った音」という意味で使われることが一番多いのではないかと思います。

事実DTMの授業などで、曲データを打ち込み終えた後「それではその旋律(伴奏)を好きな音で表現してごらん」と言うような指示が一番多いように思われます。もともとどんな音で表現するのがよいか「答えが一つしかない」わけではないし、イングリッシュホルンとフレンチホルンの違いが生産国の違いだと信じ込んでいるような子どもたちや、第1バイオリンと第2バイオリンでは楽器の大きさが違うと思こんでいるような子どもたちには「好きな音」といわれてもそれほど多くの選択肢は無いのです。

「好きな音」を口にする教師の頭の中にもそれ程多くの選択肢はないでしょう。GM(ジェネラルMIDI)の規格では128種類の「選択肢」がありますが、今全国の小学校で広く使われているアンサンブルオルガンでは6~13種類の楽器音の中から選ぶことを「好きな音」を選ぶと位置づけざるを得ません。

パイプオルガンなどでは演奏される楽器(場所)によって同じ演奏者でも異なるレジストレーションで演奏します。世界に一台と同じ楽器が存在しないパイプオルガンでは当たり前のことですが、何百個というストップを持つものから4個程度しかないものまでパイプオルガンでは絶対出せない音があるのです。(シアターオルガンは除く)

それはピアノやギターのような減衰音と呼ばれる音です。どんなに多くのストップを備えていても大きく分けてフリュー・パイプと呼ぶ笛の原理で鳴るものと、リード・パイプと呼ぶもの2種類しかなく、後は管の太さや材質、形状や位置等を変えてバリエーションを創っているに過ぎないのです。ハモンド・オルガンもドローバーの組み合わせで倍音構成(スペクトラム)を変えてあたかも多くのストップを持つかのような機能からスタートしましたが、パーカッションスイッチの採用によりコンデンサーの蓄電・放電の原理で減衰感のある音が出せるようになりパイプオルガンと決別しました。

そして、アナログシンセサイザーではエンベロープジェネレータと呼ぶ概念でこの「持続音」「減衰音」のデザインを自由にできるようにしたのです。

オルガンは典型的な持続音による楽器です。それに対してピアノは典型的な減衰音の楽器です。明治や大正のハイカラさんの家庭にはピアノやオルガンがありました。ついこのあいだまで田舎の学校にはピアノの代用として「足踏みオルガン」(正確にはアメリカ・オルガンと呼び空気を吸い込んで鳴らし、空気を吹き出して鳴らすハーモニウムと区別する)が使われていました。

はたしてオルガンはピアノの代用になるのでしょうか。ラベルのピアノ曲をオルガンで表現できるのでしょうか。もっと分かりやすいのは「古賀メロディ」をギターでなくてオルガンでイメージして下さい。多分何かが失われることに気づくでしょう。

この失われる何かとは「自己生成するイメージ」なのです。つまり、「打つ・はじく」などによるピアノやギターは聞き手にピッチとベロシティとタイミングだけを提供しますので、聞き手はその減衰して消えつつある「実音」に代わって自分の頭の中で「虚音」を自己生成して新しい音イメージを創るのです。そのことが創造的な音楽的行為なのです。

それに対して吹くや擦るなどの動作から生まれる持続音では聞き手に対して「強制的に追従する」ことを要求し聞き手の自由なイマジネーションによる自己生産的な行為を妨げます。雑念を許さない教会の典礼音楽にオルガンが用いられるのその理由によるのです。持続音はついてゆけるかついてゆけないかのどちらかの音楽でもあります。

ですから、オルガンはピアノの代用にはならないし、白黒鍵盤の姿が似ているからという理由で同じような音楽表現ができると考えるのは大きな誤りです。